

# 太平洋クロマグロも危ない

## Pacific tuna population may crash at any time

DAVID CYRANOSKI 2010年5月20日号 Vol. 465 (280-281)

www.nature.com/news/2010/100519/full/465280b.html

太平洋クロマグロの数は、  
大西洋クロマグロと同じように減りつつあるのかもしれない。

絶滅の危機に瀕しているクロマグロの中で、太平洋の集団は唯一残された砦と  
考えられていた。しかし、最近の調査によれば、資源量に関する公式報告書では  
漁業活動の変化が見過ごされており、太平洋のマグロも急激に減少しつつある  
という。

大西洋と地中海のクロマグロの個体数は、かつての15パーセント未満にまで  
減ってしまった。それにもかかわらず、3月に開かれた「絶滅のおそれのある  
野生動植物の種の国際取引に関する条約（ワシントン条約）」の会議では、大  
西洋・地中海のクロマグロ取引の禁止に関して国際的な合意を得ることができな  
かった。

これに対し、太平洋クロマグロ (*Thunnus orientalis*) の個体数は安定し、  
十分な量の若い個体が毎年成熟して漁獲分を補っていると考えられてきた。  
2009年7月、「北太平洋におけるまぐろ類及びまぐろ類似種に関する国際科学  
委員会 (ISC)」の作業部会は、「比較的高い漁獲率でも、幼魚の成熟による資源  
の増加に悪影響を及ぼしているとは考えられない」と結論付けた。

しかし作業部会は、2005年以降についてはデータ不備により、未成魚による  
資源増加が極めて不確かであることを認めている。さらに、三重大学 (津市) で  
漁業を研究する勝川俊雄によれば、資源が安定しているという考え方の根底には、  
漁業活動が変化していないという誤った仮定があるという。勝川が最も憂慮して

いるのは、クロマグロの産卵場での操業が活発化したことが、漁業従事者の聞き  
取り調査からわかったことである。この戦略をとると、漁獲効率が増すために、  
資源が増えたようにみえるのだが、実際には資源の繁殖能力を奪っているの  
である。「このような状況が続けば、太平洋クロマグロ資源は大西洋よりも先に枯  
渇するでしょう」と勝川は話す。

国立台湾大学 (台北) の漁業生物学者である許建宗は、若マグロ市場の成長に  
伴って漁業活動が変化したと話す。日本の市場では、体長10～15センチメ  
ートルの太平洋クロマグロの未成魚が1匹1万円前後、成魚は1匹数百万円  
で取引引きされる。時には、1000万円以上の値が付くこともある。勝川は、漁  
業従事者は魚の成熟を待つことで利益を増やすことができると指摘する。総  
じて、太平洋クロマグロの漁獲の70パーセント以上は、寿司ネタとして高  
値が付く日本の漁業者によるものとなっている。

ISCのデータによれば、孵化後1年未満の太平洋クロマグロの漁獲率は、  
1960年代のおよそ60パーセントから、現在では70パーセント以上に拡大  
している。しかし、勝川は、この増加は実態を過小評価した数字であると確  
信している。漁獲の90パーセント以上は満2歳に満たない個体だとい  
うのだ。「未成魚の漁獲増加は、個体数急減のリスクを増大させます。  
個体数は年々減少しつつあり、ただちに管理措置を講じなければ深刻な事  
態の前兆が現れるでしょう」と許は語る。



太平洋クロマグロの需要は大きい。

資源の健全性に関する懸念に対し、日本の水産庁は5月11日、太平洋クロ  
マグロ個体数を監視および管理するための新たな措置の概略を発表した。その規定  
では、大量にクロマグロを捕まえる大中型巻き網漁船の隻数と漁獲サイズが制限  
され、沿岸部で曳き縄等を使う漁船に関しては漁獲実績の報告が新たに必要になる。  
そして、まさに数知れない多くの未成魚を集めて生簀で育てている畜養業者  
には、登録と事業報告が求められている。水産庁は、この規制を2011年4月  
までに実行に移す計画だ。

この措置では、未成魚資源と産卵海域に関するより詳細な研究とともに、  
太平洋クロマグロ漁業の研究と管理を行う研究者の国際的ネットワークの確立も  
求めている。水産庁所轄の遠洋水産研究所 (静岡市) の研究者であり、ISCの  
作業部会報告書を取りまとめた竹内幸夫は、「産卵海域を保護するには、クロ  
マグロの行動や産卵期を解明しなければなりません。そうすることで、いつ、  
どの個体なら獲ってよいのかを決める規制をスタートできます」と語る。

勝川は、この新たな措置が「効果的に実施されれば」大きな成果が挙げら  
れるだろうと話す。しかし、実施が遅すぎて回復不能なまでに個体数が減少  
してしまう事態に陥ることを懸念している。「それは突然やってくるかもしれ  
ません。でも、実際に起こるまでわからないのです」。

(翻訳：小林盛方)